

北杜市高根町清里の萌木の村を拠点に活動するピアニスト平澤真希。ショパン生誕の地、ポーランドに16年間滞在し、ヨーロッパ各地で演奏を続けてきた。帰国後は山梨の自然をテーマにした作曲活動を行っている。「私の感じた魅力を音楽で届けたい」と話す。22日には同所の「ホール・オブ・ホールズ」でニューアルバムの発売を記念したリサイタルを開く。
〈木下澄香〉

清里拠点に活動 ピアニスト平澤真希 作曲の源泉は山梨の自然

平澤は長野県伊那市出身。東京音楽大に入學後、ショパン音楽院（現ショパン音楽大）に留学し、大学院を最優秀主席で卒業した。世界的ピアニストの原点は、実は山梨にある。「父の仕事の都合で甲府に住んでいたことがあって。昇仙峡の近くの教室で、3歳からピアノを始めた」

リストのピアノ

清里を拠点にするようになったのは約2年前。知人と萌木の村を訪れた際、船木上次社長と出会った。案内されたオルゴール博物館「ホール・オブ・ホールズ」でまず目にしたのは、ショパン音楽院時代の恩師の名前「レジーナ」が付いたオルゴール。部屋の奥では、19世紀の名作曲家フランツ・リストが愛したピアノ「チッカリング」が待っていた。「ここで弾いてくれない?」。船木社長の誘いで、清里での生活はほどなく始まった。

帰国後から作曲活動にも励む平澤の心をとらえたのは、日本の美しい自然と、日本人の自然崇拜の心。清里で演奏する傍ら、県内の山々を歩き、自然に触れた。中でも、山梨と埼玉の両県にまたがる、笠取山の「水干」と呼ばれる水源で見た景色が忘れられないという。

「ボタ、ボタって、ゆっくりしずくが落ちていて。この一滴一滴が東京の人たちの生活を支えているって思ったら、感動しちゃって」。水干から丹波川、そして多摩川へと流れ込む水の旅をメロディーにした「多摩川」（仮題）を作った。

無限の広がり

作曲活動のキーワードになった「水」。16年間、ポーランドで向き合ったショパンとの共通点もあると話す。「ショパンの曲はすごく難しい。複雑で、無限に広がっていく感じ。探っているうちに、水に似ていると思えるよ



清里での活動を決めるきっかけとなったピアノ「チッカリング」の前に座る平澤真希。「自然豊かな清里にいられることが幸せ」と話す。北杜市高根町清里の「萌木の村」ホール・オブ・ホールズ

うになった」

清里の魅力は語り尽くせない。季節ごとに表情を変える山の景色、満点の星空、動物の鳴き声…。「素晴らしい環境で生活している。私が感じたことを、音楽にして届けたい」と、今後の作曲への意気込みを語る。

リサイタルでは、先月19日にリリースしたCD「オマージュ・ア・ショパン」に収録されている「バラード」「ノクターン」のほか、清里の自然をテーマに平澤が作曲した「昔の記憶」「水のプレリュード」などを演奏する。「自然の恵みへの感謝の気持ちを、聴きにきてくれた人たちと共有したい」



「平澤真希ピアノリサイタル」は22日午後7時から、北杜市高根町清里の萌木の村のホール・オブ・ホールズで開演。チケットは全席自由3千円。問い合わせは同所、電話0551(48)3535。